

おばあさんと花

尾張旭市立東中学校 3年 中野友梨香

「今日はありがとう。」

中学一年生の秋、私は職場体験で市内の老人ホームへ行った。そこでは、おじいさんおばあさん達が、みんなで塗り絵をしたり、歌を歌ったり、パズルをしたりしていた。私もその輪に加わると、皆、歓迎してくれた。私がおしぼりを配りに行っただけで、目を輝かせてお礼を言ってくれたおじいさんや、通る度に孫の話をしてくれたおばあさん。私にとって慣れないことも多く、大変なこともあったが、不思議と心が和む場所だった。

ふと向こうを見ると、車いすに座ったおばあさんが、隅でひとりじっと何かを見つめていた。その視線の先には、花瓶に生けられた花があった。そのおばあさんは、きれいなエメラルドグリーンの服を着て、口紅も薄く引かれ、おおらかな雰囲気のある女性だった。

しかし、彼女はわざと誰にも話しかけられない場所を選んでいる気がした。私はそのおばあさんに引き寄せられるようにして行き、そっと隣に座った。窓ガラスの向こうから、眩しいほどの日の光を浴びた葉っぱがきらきらと輝いていた。おばあさんが見つめる花はごく普通の花で、小さいながらも美しく咲き誇っていた。それは私にとっては、日常でよく見かける風景だった。

おばあさんの腰は曲がっていて、車いすに乗せた手はしわだらけだった。しかし彼女が眺めるその目には、凜々しさの中に、なにかさみしいものを感じた。

「何かありましたか？」

と私は尋ねた。

「いいえ、別に。」

清く透き通るやさしい声とは裏腹に怒りのようなものを感じた。その声を聞いた私は親切なことをしているという満足感が暗闇につき落とされたような罪悪感に変わった。それと共に、自分の心の内側を見透かされた気がした。私はおばあさんの応答に返す言葉が見つからなかった。私の親切心はその時と場だけの偽りだったのだろうか。私は頭を巡らせた。今までは、おじいさんおばあさんに行く

ら同じ事を言われても嫌な思はず何度も返事をして会話を続けた。私自身もそのことを喜ばしく感じた。決して偽りなどではないはずだ。しかし彼女のその言葉だけには応えることができず、そんな自分を情けなく思った。

一度席を外し、私はもう一度おばあさんのところへ行っった。驚いたことに彼女の方から口を開いた。おばあさんは、戦争を乗り越えてきたことや最近の趣味などを語ってくれた。彼女の話はどれも興味深く、我を忘れて聞き入った。その中で彼女は気になる言葉を発した。

「摘まれた花は一週間しか生きられない。だから今懸命に自分を主張しているのよ。」

この瞬間、私は心のどこかが強く締めつけられたのを感じた。毎日当たり前のように見ていた花瓶の花。一見力強く咲いているように見えるが、本当は命が終わるかもしれない明日を恐れながら咲いているのだろうか。少なくともおばあさんにはそう見えているのだろう。おばあさんが憐みの目で花を見つめる姿に胸が苦しくなった。そしておばあさんの悲しいと思う気持ちに触れることができた気がした。

花も人間も、一人で生まれ、一人で死んでいく。その間、自分の思いを全てうまく伝えられるとは限らない。伝えたくないこともあるだろう。ただ、その人のそばにいてあげる何気ない気持ちが、きっとその人の重荷を少しずつ軽くしてあげられるはずだ。そしてそれが今の私にできる唯一のことだ。八十年、九十年、私の何倍もの人生を切り開いてこられた方のそばにいてそのことを学んだ。そしてそれらは私がこれから先いろいろな人と関わりあう上で、大切な基礎となるだろう。

帰り際におばあさんはこう言った。

「今日はとても楽しかったわ。ありがとう。また会えることを楽しみにしているわ。」

その言葉を聞いた私は胸がはち切れそうになった。私は中学生でまだ知らないこともたくさんある。無意識のうちに誰かを傷つけることがあるかもしれない。それでもそばにいてあげるだけでほんの少しでも力になることができたのであれば、本当に訪れてよかった、と心から思う。そしてまたいつか戻ってきたい、と強く感じた。